

オリ主in暗殺チーム

乾燥したマシュマロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

暗殺チームにオリ主ぶちこんだけのお話。

見切り発車なうえに文もめちゃくちゃですが、良ければどうぞ。

目

次

蜂の目覚め

蜂のお使い

金を運ぶ蜂

蜂の感動

蜂の始まり

眠れる奴隸

蜂の啓蟄

蜂使いと送り蜂

先鋒、対峙

49 42 37 31 26 21 12 5 1



# 蜂の目覚め

蜂の羽音が聞こえる、恐らく俺の仕事が終わつたのだろう。ゆっくりとベッドから起きあがり、窓から外を見やると警察署長…ええつと、名前は忘れたが麻薬取り締まりを強化するだとかなんだとか…そんなことをほざいていた奴がクジラの様に全身腫れ上がり死んでいた。勿論、周りの奴等は大慌て。

署長の演説していた広場は軽いパニックになつていた。

そんな中、俺はホテルの部屋で携帯を手にしていた。そんな騒ぎはどうでも良いのだ、死んだ人間に興味もなければ俺と署長との接点はもう、どうでも良いものなのだから。

『俺だ、もう終わったのか?』

電話の相手：今回手伝つて貰つたイルーゾオが少し呆氣無さそうに呟いた。そりやあ俺のスタンドで仕事をすれば、真正面から戦う事はおろか俺の存在に気付くことすら難しい。そういうスタンドなんだから一瞬だろう。というより、お前のスタンドの方が呆氣なく終わるだろ…。ま、そんなことはどうでも良い。

「お前には世話になつたよ、今度奢る」

『まあ仕方ねえさ、アジトで落ち合おう。それじゃあな』

俺のポリシーとして協力や手伝いをして貰つたなら、必ず礼をするというものがある。それは俺が助けられた過去があるというのも起因しているが、本当のところは恐らく俺の前世が平和ボケした日本人だと言うところだと思う。

どう言うことかと説明するならば、俺は死んだと思つたらジヨジヨの世界で誰かに憑依していた。ということだ。正直最初は全然分からなかつた。自分は孤児だつたので生きるのに必死、転生だのクソだの言つてゐる暇はなかつた。必死に生きて、気づけばギヤングへの道を進んでいた。パッショーネ…その名を聞いてから引っ掛かつてはいたが、気づいたのはポルポの矢に射られてからだ。あの矢を見て初めて思い出した。まあ、思い出したからつてどうにもならなかつたが。あの三日間は地獄だつた、もしかしたら死ぬかもしれないとの恐怖との戦いだつたが…見事にスタンドを身に付けることができた。…憑依したせいか特殊なスタンドになつてしまつたが。

まあ、そんなことはどうでも良い。重要なのは、俺のスタンドがかなり暗殺向きだつたので暗殺チームに配属されたことだ。死亡フラグ満載の状況だつたが、俺はある『覚悟』をきめた。アイツらは…暗殺チームは原作では冷遇された挙げ句全滅という憂き目に合う。俺は…それを変えたい、そう思う程に皆と絆を深めたと思つてゐる。何しろチーム創設とほぼ同時…リゾットとプロシュートしかいなかつた頃から居るのだ、そ

りやあ愛着の一つや二つ沸くだろう?

「大変だらうがな…」

やるしかない、あんなパツと出の主人公補正マシマシ野郎に全滅なんぞさせられてたまるか。俺達は栄光を掴み取り、ボスをその座から引きずり下ろし、リーダーをその座に着ける。

：何故か分からんがボスの名を覚えていなのは、修正力かナニ力が働いているのだろう。

「俺自身の力で、か」

俺は呟くと、アジトの扉を開いた。中にはいつものよう仲間達が座っている。ホルマジオ、イルーゾ、プロシユート、リゾット。後のメンバーは恐らくいつものように自室で寝てるんだろう。メローネとソルベ、ジエラートは…うん。

「首尾は…と聞くまでも無さそうだな」

リゾットはそう呟いた後、口をつぐむ。長い付き合いのなので言わなくともわかるのだという。確かに俺は仕事は完璧にこなしたい方だが、たとえこなせなくとも多少テンションが違うだけでそんなに違いは無いと思うんだが…プロシユートやリゾットはすぐ気つく。やはり付き合いの差だろうか。

「それで、今回の報酬は受け取ったのかよ」

ホルマジオがそう言つて俺に問いかけてくる。報酬は口座に入金だと告げると「そ  
うか」と言つてそのまま猫を撫で始めた。

「まあた野良猫撫でてんのか、いい加減諦めたらどうなんだ」

「るせエな、好きにさせろよ」

プロジェクトがからかい、ホルマジオが言い返す。二人とも口ではああ言つて  
いるが、本当は信じ合つていて。やはりこの空間は良い。

「なんだかなあ…テメエらガキか！」

「それがなるイルーゾも、なんだかんだ楽しんでいるのが分かる、心地良いのだ、こ  
の空間は。

「おい、エイブからも何か言つてやれ」

「やめろイルーゾ、話を振らんでくれ面倒くさい」

見るのは良いが、巻き込まれるのはゴメンだな。

# 蜂のお使い

さて、昨日の仕事が終わって今は朝。

今の状況を軽く説明しよう。とりあえずまだペツシはいない。つまり原作が始まるのはまだ先のハズだ。言い切れないのは、この世界で過ごしてきた25年間で記憶も磨耗し、覚えてないからだ。覚えているのは、暗殺チームの覚悟を決めたときはペツシが居たくらい、ジヨジヨの顔もボスの姿も覚えちゃいないのだ。

「仕方ない、か」

俺は立ちあがりアジトを出る。今日は非番なのだから、楽しまなくつちやあいけない。息抜きつてのは重要さ、それはこんな明日もどうかわからない仕事なら尚更な…。さて、それじやカフエで新聞でも読んで過ごそうかな。やることないし、昨日の暗殺の件がどれだけ大事になつてるかも気になるしな…。

さて、今回の仕事つてのは実はあの署長だけがターゲットじやない。本当の目的は、麻薬の取引中に捕まつたうちの…パッショーネの構成員を片付ける事だ。あの野郎、自分の刑期を短くするためにどうやら情報の一部を垂れ流したらしい。その事で組織はお冠、信用を失つたソイツは見事にターゲットになつちまつたつて訳だ。そして、署長が死んだ今がチャンス。俺達の仕事はソイツを殺すこと、それだけの簡単な仕事さ…。

そりやあ流れた情報はどんな事なのかとか、流れちまつた情報をどうするのかって所も気にはなるが…暗殺チームにそんなことは伝えられる訳もない、気にし過ぎるとこの業界では長くない。こういうことは気にしないのが一番だ。

ピロピロと軽快な音が鳴り、ポケットが振動する。どうやら電話のようだが…着信表示されているのはイルーゾオ、遊びにでも誘いにかけてきたのか。

俺は電話をとる。

「もしもし、俺だ。何かあつたのか」

《ああ、決行日が前倒しになつた。今から動けるか?》

今から…左腕の時計を見る。昼前、11時頃か。特に予定はないし、問題は無さそうだな。

「問題ない、取りかかろう」

『頼んだぜ、この手の仕事はお前が一番早エからな』

電話を切つたあと、俺は仕事の時の正装になる。タートルネックを口元まで上げ口を隠し、フードを被れば仕事モードだ。

それにしても、全くありがたい言葉に泣きそうになるね。俺は今憧れの人たち兼仲間に認められている…こんなに嬉しいことはない。

まあそれはそれとして。

「キラー・バレット」

俺が小さく呟くと、俺の掌に大きめの蜂が二匹現れる。一方は大きさがスズメバチ位の大きさ、見た目は赤と黒。こいつが俺のスタンドの一部、キラービー。

もう一方がちよつと小さめの蜜蜂程度の大きさ、バレットビー。この二種類の蜂が俺のスタンド、俺の精神の具現化。憑依したせいか二種類に分かれたこのスタンドは、総勢500匹の群体型スタンドだ。

「刑務所まで飛べ」

今回飛ばすのはキラービー、こちらは強力な毒と顎をもつスタンドで集団で襲えば例え近距離パワー型のスタンドといえども対処できずに死に至る。なんつたつて数が違ううえに一匹でも逃せば毒を食らう。流石に一発で即死はないが、二回以上食らえばかなりヤバイ。俺のスタンドの毒でもアナフィラキシーは起こっちまうし、そもそも毒

もかなり強力だからな。

「そろそろか…？」

俺は刑務所へ歩いて行く。流石にスタンドを通して確認できる範囲は蜂なだけあって狭い、精々3mといった所までしか見えずそれ以上はボケる。スタンド越しの偵察は確実だが、遠すぎると見えにくいのだ。一度それで失敗してからはできるだけ直接確認するようしている。

マンションの屋上まで行き、懐から双眼鏡を取り出す。刑務所の鉄格子がよオーく見えるところまでだ。そして…捉えた。ターゲットと俺のスタンド、距離は殆どない。今回飛ばしたのは総勢10匹のキラービー、殺すには充分すぎる数だ。今か今かと鉄格子の外で待つ姿は小さいながらも狩人そのもの、俺ならこんなスタンドには襲われたくはないね：俺の精神の表れなんだからそんな事言うのはお門違いなんだろうがな。つとと、そんな話はどうでも良い。今はさつさとターゲットを殺らねば。

「殺れ」

俺の合図とほぼ同時に、俺のキラー・バレットがターゲットに襲いかかる。無論只の下つ端構成員がスタンドを見るハズも無く、全身を刺されて訳もわからぬまま全身をクジラのように腫れ上がらせて事切れた。我ながら、かなりエグい能力だと思う。流石に主人公の仲間のアイツ：名前は忘れたが、アイツほどじやあないがね。

とにかく、今は連絡しよう。

「イルーゾオ、俺だ」

『おお、お疲れさん。流石最年長、仕事が早エ』

茶化す様に言つてくるイルーゾオ。なんだか腹が立つ言い方に聞こえるが、単に皮肉つていいだけで褒めてはいる。本人に悪気は：無い、多分。

「褒めてるのか馬鹿にしてるのか…まあいい、帰投する」

それだけ言つて電話を切る。何か言いたそうにしていたが無視だ無視。別に年齢の話でぶちギレとかそんなんじやあない。ないつたらない、ほんとだぞ？

「切りやがったぜあの野郎オ」

ニヤけながらチームの方を見る。アイツは年齢の割りにかなり若く見えるんだがそ

れを本人が自覚してねエんだ、それどころかイジると途端にむすつとしやがるんだから  
まあ面白い。

「テメエが年齢の話振るからだろうがタコ！」  
「おい、ペツシの話どうすんだア!?」

ホルマジオは半笑い、ギアツチヨがキレて俺に突つかかってくる。アイツの事だ、  
帰つてきて話すでも構わんだろう。そうしていたらリーダーが部屋に帰ってきた、どう  
やら騒ぎを聞き付けてシャワーから戻ってきたようだ。

「…どうした」

「リーダー：何にも問題はないさ、イルーゾオがエイブをおちよくつただけだよ」

メローネが笑いながらリーダーへ説明する。アイツの年齢イジりは最早チーム中で  
は見慣れた光景なんだが：新入りが戸惑つてるな、プロシユートが世話役らしいが：ア  
イツにできるのかア？

「おいペツシ、今から帰つてくるヤツが俺達チームの最年長だぜ。仕事に対しても真面  
目な堅物だがそれ以外では抜けてる野郎だ」

プロシユートの説明に頷く俺達。そりやあ誰だつてそういうんだろうよ、ビデで顔洗つ  
たりビデでアングリア冷やしてたり、湯船一杯にお湯いれて浸かつてみたり：何かとお  
かしな行動が多いんだよなア：アイツ。

「そ、それは：なんというか、変わった人なんスね」

「そんなに気張る必要のある人間じやあない。楽にすればいい」  
リーダーの言葉に皆また頷く。確かにおかしな行動をとるアソツだが、信頼できる仲間であることもまた確かだ。

さあて、早く帰つて来やがれつてんだ。反応が楽しみで待ちきれないぜ。

# 金を運ぶ蜂

いやあ…参ったね。だってアジトに帰つたらペツシ居るんだもの。そりやあビビるよね、仕方ないね。ビックリしすぎてスタンンド出しちやつたけど問題ないね。

さてさて、所変わつてあれから一週間。今となつては馴れ親しんだペツシとプロシユートのコンビは、今日も仕事だ。俺達暗殺チームのイメージとして、仕事はあまり無さそうだと思われがちである。しかし、これがそうでもない。それもそのはず、パツシヨーネ自体最近のしあがつてきた地方ギヤングに過ぎず、世界規模でみればしょっぱいギヤングなのだ。今なお規模を増やそうと活動しているボスは、今日も今日とて仕事を回してくる…お値段が少々異常ではあるが。

「全くよオー、もうちつと貰つたつてバチは当たらねーよなア?」

「そうだなア…ソルベ。お前が言うならそうかもなー」

今日も暗殺チームのラブコメ担当は絶好調である。目の前でイチャコラされる方の気になれてんだよ、男同士の絡みより女同士の方がまだ見れるわ!

「なアーエイブウ！お前もそう思わねエか？」  
話を振つてくるソルベ。正直相手にしたくないが、振られたら話すしかない。それよ

り今は金を稼げそうな方法を考えてるんだけどなあ…。

「んあー。まあそりや貰えるなら貰いたいさ、だがボスにたてつくのは不味い」

原作でもイカれてると評されたコンビだが、話してみると意外とマトモなやつらである。：一部を除けば。うん、やっぱできてるわ。

「そーだがよ、おかしいとは思わねエか？俺達無敵の暗殺チームだぜ、それがこんな扱いをよオー！」

「ごもつとも、俺達が本気で殺しにかかるば護衛チームなんぞ一捻りにできる自信はある。というより俺のスタンダードだけでも殺しきれるつもりはある。ソルベもジエラートも、スタンダード能力は強力だし相性もいい。俺だつて命を狙われたら恐らくは勝てないくらいにな。

そんな強力なスタンダード使いの集まりだからか、俺達の間には不満が多い。ただの暗殺ではなく政府要人だと警察の幹部などを殺す俺達は、より多くの報酬を貰つても構わない筈なのだ。無論リゾットだつて忠の厚い男だ、反逆の意思すら見せたことがない。

「まあ：確かに、それは言えてるかも知れんがな」

「だろオ？ならやつぱり報酬を貰うべきだぜ」

「そうだな、ソルベの言う通りだぜ」

全く：金にがめつい奴等だよ、今のところは仕事もあるから経営難レベルではないだ

ろうに。そりやあこのままじやジリ貧だし、多いに越したことはないけどさ…。

「まあその辺の交渉はリゾットに任せておけ、変な行動を取ればリゾットの名を落とすだけだ」

「…そオーダな、リゾットに迷惑はかけられんねエ」  
「ソルベ、飯でも食いに行こうぜエー」

なんだか今のは会話が分岐な気がするのは俺だけか？原作じやあどこのタイミングでソルジエラが動き出したのか分からなかつたからなあ。これで多少改善できれば良いんだが：俺が避けたいのは輪切りだ、これだけは避けたい。：最悪、ホルマジオから助けることになるかも知れないが、それは最悪の場合のみだ。俺は暗殺チームを救うのだ、それには全員揃つて生き残る必要がある！

「そうだろ？ なあ…」

このあと滅茶苦茶白い目で見てくるソルジエラに言い訳倒した事を記しておく。

「あんの野郎共オ：俺を白い目で見やがつて」

とあるレストランテの野外席、ピザを食いながら一人愚痴る俺は飯を食いに来ていた。こここのピザは旨いのだ、それこそ俺が足しげく通うくらいには旨い。それと値段が安い、日本で食えばいくらするかわからん。うそ、日本のピザ…高過ぎ…?

「ピツツア一枚、あとスープもくれよ」

いつの間にか俺の前に座るギアッチョ。店員は畏まりました、とだけ言うと店内へ入つていつた。なんでお前が居んのよ。

「ギアッチョ? お前も飯か」

「そオだぜ、さつきまで買い物に付き合わされてな…」

「ああ、そういえば今日の当番はギアッチョか」

我らが暗殺チーム。なんと晩飯は当番制なのである。料理が上手いのは意外にもペツシと俺、前世の独り暮らし初期に鍛えた料理スキルはここでも役に立つのだ。ホルマジオやイルーゾ、リゾットは普通。プロシユートは…気分が乗れば旨い、外したときのコレジャナイ感が凄まじいが。

ギアッチョは普通に食えるけどキッチン汚れたりぶつ壊すからあんまり好まれない。

「今日はキレるなよ?」

「わかんねエゼ、そんなことはよオ」

そのままギアッチョと楽しい一時を過ごした。アイツはなんだかんだ言つてマトモ

なやつなのだ、話せば分かる…というヤツ。まあ納得できなきや暴れるので最初は大変だつたけどな。

「そおいやよ、お前：金儲け考えてんだつてなア？」

ギアッチョが聞いてくる。そう、金さえあれば俺達だつてあんな目に合わずにすむのだ、そりやあ金儲けは考えるだろう。でも上手いこといかんのだよ…宝くじ作戦はボルポの賭博の方に合併されたり、麻薬は別のチームの管轄だしなあ…。

「なんか良い案ねえかなあ？」

「俺アねえな」

とりつく島もないとはこの事か…もうちよつと考えてから言つても良いだろうにこの野郎。

「なんならテメエのスタンドで蜂蜜でも作れればなア」

蜂蜜なんぞ作れたら作つてるつづうの！だが：モノを売るつてのはいい線かもしけない、蜂蜜：イタリアならオリーブとかか？その辺を輸出でもすれば収入にはなるか：？いや、輸出なんぞしているのは知つている限り麻薬チームの麻薬だけだ、それなら申請されすれば認められるかもしれない…！

「それだぜギアッチョ！ありがとよオ！」

俺は自分のぶんの金だけおいて、急いで立ち上がる。まずはリゾットに電話する！流

石に無許可は不味い、だがリーダーが許可を出したならツ！俺は動ける！

『俺だ、珍しいな』

リゾットの声、今は聞くだけで涙が出そうになるぜ！俺の悲願が達成できる…その可能性が！運命の赤い糸が束になつてやつて来たような気分だぜ全くよお！

「リゾット！儲け話を手にいれたんだ、交渉を任してくれないか!?」

自分でも言葉足らずだと思う、だがリゾットならばこれだけで理解してくれる。俺の

言いたいことは俺以上に理解しててるようなヤツだからな。

『…なにか分からんが分かつた、お前がいうなら任せよう。頼んだぞ』

向かうのは勿論蜂蜜やオリーブの件、行く場所は勿論ポルポのいる刑務所だ。

「ポルポオ！居るかあ？いるだろオガヨ！返事しやがれエ!!」

ヤツには多少の貸しがあるので交渉は楽なはずだ、それにやつにだつて利益が出るなら断られる確率も下がるはず。金があればソルジエラの暴走だつて押さえられる！俺

達の勝ちは確定になるんだ…。

「なんだねうるさい…ああ、エイブか。なんのようかネ？」

いやさあ、いつもこいつと会うたびに思うんだがよ…こいつこんな話し方だつたつけ？もうちとマトモなしやべり方する奴だと思つてたんだが…なれないな。

「儲け話さ、お前にも取り分がある旨い話だぜ？」

ポルポの目がピクリと動くのを見逃す俺じやあない、恐らくは食いついた。それも俺が話を持ってきたことに…な。

「ほう？あの嫌われ者の暗殺チーム…その副リィーダーが儲け話とは面白い冗談だ」

「冗談じやねエーよ、マジだぜ。ポルポよ、お前さんもそろそろ新しい稼ぎ先を開拓する頃だろう？」

畳み掛けるように問いかける。逃がすわけにはいかないんだよ、俺達には時間がない

…！既にペツシが入つてゐる今ツ！いつ奴等が勝手に動き出すか俺にはわからない！

ならさつさと不確定要素は埋めてしまふしかない！ボスへの反逆行為は：確実に始末できるまで起こすべきじやあないんだよ、ボスの能力：俺の記憶にはもうほんのちつぽけなカケラすら残つちゃいないが…ヤバイ能力なのは確かだ。それも俺達暗殺チムが全員でかかるとも勝てるのか俺にはわからない、それぐらいヤバイ能力であることだけは覚えてる。なんてつたつてレクイエムとかいうチート使わなきや勝てないくらい

いだし。

「…確かに、お前のいう通りだとも…賭博というジャンルは古来よりあるモノだ、新規のモノは作りようがない。それで、お前は私に何をしてもらアいたいのだね？」  
 「俺達のチームにモノの輸出権利をくれ、お前には：『貸し』があるだろ？ならば、俺の頼みを断るのはよオ…あのときの俺の『信頼』に対する『侮辱』になるんじやあねエーか？」

この『貸し』…俺が暗殺チームに配属される前に賭博の場をちょいと手伝つていたのさ、それでその場の整備やらルールやらを制定したりと…まあその、俺も若かつたし日本人の性というか…真面目に仕事してたら目につくんだよね、仕事不真面目なヤツとか非効率なところとか。

だから真面目に整備しちゃつたら…いつの間にか『貸し』になつてたつてことだ。いやあ…貸すつもりはなかつたが、いつ何時自分に帰つてくるのかわからんもんだな。これも、『運命』つてやつなのかね？

「フウム…確かに、君の言うことは尤もかもしるエンね」  
 「…ツ！なら」

「但しツ！それは君達を私が『信頼』するのだよエイブ、信頼には信頼で答える。だがもしツ！万が一に君達がパツシヨーネの『信頼』を『侮辱』する行為をしたならばア…そ

れが分からん君じやあないだろう?」

わかってる、これは脅しだ。手にいれた資金でもし組織を裏切ればどうなるのかといふ脅し。俺達の事なんぞどうでも良いと思つてているのがよく伝わるぜポルポ、だがお前は少し勘違いしてるよ…。

「ああ…勿論だ」

お前らは信頼なんぞしていない、むしろ俺達を侮辱している。それに：俺はお前の事を信頼なんぞした憶えはないんでね。いずれお前も始末するさ…ポルポ、だが今は利用されてくれよ。俺達だって反逆の意思が芽生えかけているのを『我慢』してるんだぜ…?

嘘をつくのは忍びないと思つてゐるが…俺達暗殺チームを舐めてかかつた代償は…組織ですら払えないほど大きくなつてる事を忘れるんじやあねえぞ。

## 蜂の感動

ポルポからモノの輸出許可をもらつた俺は、早速チームの皆にこの朗報を伝えた。そりやあ皆喜んだよ、何てつたつて資金源ができたんだぜ？シマジやあないから利益はその時の情勢などで変動するかもしれない、だがそれでも無いよりはよっぽどましだな。「それで？一体何を出すんだ、輸出つつつてもよオーモノが無けりやあ、輸出しようもないだろ？」

「勿論だホルマジオ、お前の疑問はもつともだ。契約等は俺とエイブで取つてこようと思つていてる」

リゾットがしつかりと説明してくれる、あれ？これ俺要るのか？…考案者だし要るよね、ね？俺がちよつぴり不安になつていると、ペツシがおずおずと手を上げる。「で、でもリーダー…その分上納金はどうするんです…？」

「その点はエイブから説明があるそうだ。エイブ、説明してくれ」「あいあい、リーダー」

ほれきた俺の役目！解説。某解説王みたいには無理だけどな！  
話がそれた：俺の計画は至つてシンプル、古典的な方法で俺達の稼ぎを作る。ソルベ

とジエラート、ホルマジオには暫く手を貸して貰わなきやならないが。

俺の考えた方法、それはホルマジオのスタンドである『リトル・フィート』の能力で申告していない密輸品を小さくする、これだけで検査に引っ掛けられない資金源の完成だ。次にすることは、ソルベとジエラートに協力してもらつてスタンドフル活用で動いてもらう。

ソルベのスタンド『キープ・ホールド』は姿と触れたものを見えなくすることができます。スタンド、十分強力だと思うんだが、影や音は残るのでそのままではあまり使い道はないらしい。だが、これがジエラートのスタンドと組み合わされば無敵のスタンドと化す。『ホール・クワイエット』、ジエラートのスタンドで音を消すスタンドなのだ！

コイツらがコンビを組めばもー大変、姿も音もなにもなく気がつけば人が死ぬ。もつとも暗殺に向いている能力だと思う、実際リーダーのあの砂鉄による姿隠しもソルベのスタンドからヒントを貰つたって言つてたし。

んで、何が言いたいかというと過少報告して浮いた金をポケットに入れようぜつて話だ。隠しもつて密輸したブツを売り捌くヤツが要るので、そこをソルジエラに任せる。勿論見つかれば罰は食らうだろうが、反逆してる訳じやあないんだから輪切りは回避でくる…はず。

「…とまあ、ホルマジオ達3人の負担がかなり大きな仕事になる。嫌なら頑張つて他の

作戦を考えるが…」

ホルマジオ達の方を向く、ソルベとジエラートは相変わらずくつづいて笑つてゐるし。ホルマジオは頭を搔きながら下に向いている。そりやあ急に言われても困るとは思う、だが俺の鳥頭ではこの程度の作戦しか思い付かなかつたんだ…。

ホルマジオが顔をあげる、その顔には覚悟があつた。覚悟がある、なんて言い方はおかしいかもしない…でも、俺にはそう形容するしかなかつた。こんな作戦に、こいつらは命を懸けてくれようとしている。その事実が、堪らなく嬉しかつた。

「エイブよオー、俺達がチームの為になる事を断るわけねエーだろ。なアソルベ？」

「勿論だぜジエラート。リーダー、その仕事…俺達が請け負つたッ！」

「しようがねえーなあー！俺の能力がなきやあ始まらねエ仕事だろ？やつてやるぜ」

三者三様の言い分さえ見せるものの、その答えはいずれも肯定。皆もチームの為に働くしてくれるのだ、俺は…この件はお願ひするくらいしか出来ない。俺のスタンドは強力だがこういったことには向かない、だから最初から誰かに頼むつもりではあつたが…こんなにあつさりと覚悟してくれるだなんてな。…文字通り命懸けの金稼ぎだというのに。

…なんだが急に泣きそうなんだけど、マジでこれで泣いたら笑いもんだぞ。

「ありがとう皆…頼む」

「そういうことだ、ホルマジオ達は俺の連絡がくるまでは今まで通り仕事をしていくく  
れ」

リゾットの一言で皆解散しだした。俺はただ、深く頭を下げながら涙を我慢するしかできなかつた…。

皆の前で涙目晒して大ウケされた阿呆は誰だ？

•

• • • • •

俺だよクソッタレ、バレたときにペツシが居なくて良かつた：バレてたら自殺ものだぞ。誰も29歳の涙目なんて見たくねえよ！…リゾットのなら見たいやつ居るかも…いや、居ねえな。

気分直しで秘蔵の日本酒を取り出す、俺がわざわざ別チームのヤツに頼んで持ってきて

て貰つたやつだ。

今夜はやけ酒だああああ！

# 蜂の始まり

密輸を初めて約3ヶ月、成果は順調に出ている。勿論組織にもばれずにだ。今のところは問題はなさげだが、この先の事は分からぬ。

オリーブの加工品や蜂蜜、金等を運ぶ俺たちは海を渡る事は仕事柄できない、流石に暗殺を止めてしまう事はできなからぬ。それでも金や食料品は俺達10人程度の金を貯うには有り余る富を、たつたの3ヶ月で生んだ。このまま続けていけばいずれれるだろうが：今はもう少し金を貯めるのも悪くはないだろう。

今回の仕事は、環境大臣に突つかかる議員を片付けることだ。この任務はウチのシマだけではなくパッショーネ全体の麻薬取引に関わる案件、それだけ俺達への重圧はかかる。そのぶん取り分は多少大きくなる、ほんの微々たる量だ：まあこんな仕事俺達からすれば屁でもない仕事なんだ、いつもと同じ仕事で金がいつもより増えるなら安いもんだ。

俺は電話を取り出し、プロシューートの方にかける。今回の仕事はペツシに『殺し』を慣れさせる意味合いも含まれている、というよりは慣れさせるためにこの仕事を利用した。つまりペツシは今日『卒業』なのだ、今までの仕事の様に：言っちゃあ悪いが『チ

ンピラでもできること』から『暗殺チームの仕事』へ昇華する。

俺達がその辺のチームと違うのはそこなのだ、生半可な覚悟じやあ潰れちまう、潰れた先は…壊れて病むかクスリで廃人だ。

人の『殺し』を生業とするならば、派手な『覚悟』はいらない。要るのは必要最小限の、それでいて強固な『覚悟』だ。力んでいつも以上の力を出す必要なんぞない、要るには安定した殺しなんだから。

だからペツシには…人の殺しに慣れてもらう必要があるのだ。いちいち死体や血や痛みにビビつてるようじやあまだまだ、とはプロシユートの談である。

いや…俺も痛いのにはビビるぜ、プロシユート…。

『もしもし…エイブか、どうした』

プロシユートが出た、背後からはペツシの声もある。声色からかなり緊張しているのが窺えるが…しようがないなあ。

「プロシユート、ペツシはどうだ？」

『…まだ早い気はする、だが暗殺チームに入るには必要な事だぜ』

それはそうなんだが…プロシユートが良いと言うならなにも言うまい。アイツに任せとけばペツシは大丈夫だろう。…大丈夫だよな？ペツシの奴、俺と似たようなコートまで着てるし…最初はただの服だつたのに、いつの間にか俺とお揃いのコート着てた

んだよなあ…。曰く『憧れの先輩と同じ服を着れば勇気が湧くと思ったんっス』だそ  
だ。憧れて…て、照れるわ。

『そろそろ決行だが…対象は入ったのか?』

プロシユートに言われて今回のターゲットに目を向ける、向けると言つても双眼鏡越  
しだがな。丁度車から降りて向かっている、そこが文字通り『最後の晩餐』となるわけ  
だ：『最期』のな。

それにしてはいいリストランテなんじやあねえのかな、高級志向のいい店だ。

「もう着くぜ、準備しどきなよ」

プロシユートに連絡だけして俺は配置につく、今回は俺は連絡役なのだ、仕事はほぼ  
終わりに近い。始末するのはホルマジオ、アイツならば俺がフォローする必要もないだ  
ろう。イルーザオとかだとこつちの世界に落とした武器やらを回収しないといけない  
からなあ…。

そんなことはどうでもいいか、さつさとこの仕事を終わらせて寝るとしよう。なんだ  
か今日は胸がムズムズするんでね。

結論から言えば、仕事はほぼパーエクトだつた。連れの女も死んだが、それくらいならば誤差の範囲だろうよ、誉められたものではないけどな。

「帰つたぜエ！」

ホルマジオがアジトの扉を勢いよく開く、中にはリゾット達いつものメンバーガいる。だが：ソルベとジエラートの姿が見えない、いつもならこれだけ大がかりな仕事が入れば、必ず姿を見せるのに…。

「：首尾は」

「パーエクトだ！任務は果たしたぜ」

「連れの女も死んじまつたがな…」

得意気なホルマジオに釘を刺すプロシユート、多分ペツシが見てたから張り切りすぎたんだろうね。俺も分かるわ：ペツシに偵察任務のお手本見せるときはかなり緊張したもの。なんとかいつものように上手いこと仕事をこなしたもの、もうちょっとで失態を晒すところだつたぜ！

ふと顔をあげてみればギアツチヨがキレてリゾットにたしなめられていた、どうも報酬の話でキレたらしいな。全く、いつもの光景過ぎてホツとするぜ。

だが、このときの俺は――

ゆつくり迫る『原作』の魔の手に気付くこと無く――

「リーダー！すまねエ、ソルベが…ソルベが！」

本来腕のあるはずの場所から血を流して倒れ込むジェラートを…

俺は、眺めることしかできていなかつた――

## 眠れる奴隸

騒然とするアジト内、悲鳴をあげるペツシとそれを止めるプロシユート。冷や汗を流して立ち上がるリゾットや騒然とするメンバー達。そんな中、俺は一人目を見開いて呆然としていた。

この状況は予定内のはずだ、限りなく可能性を低くはしていたが：俺の中にはこの光景があつたはずッ！

それなのにッ！覚悟を決めたはずなのに：俺は思考を一瞬止めてしまつたのだ！これではいけないんだよ、こんなお粗末な状態じやあ護衛チームには勝てない。俺は、この『物語』の主人公を殺す存在じやなきやあいけないんだ。

こんな立場になつて、DIOの言つていた『安心』や『恐怖を持たない』といったことがどれだけ難しく、そして理想であるかがわかつたのだ。

「落ち着けエツ！」

自分でも驚く程大きい声が出た、チームの皆も俺の声で我に返りジェラートの応急処置を施しだした。リゾットの指示の下、患部を凍らせる事によつて止血する。このままじやあ話を聞く前にジェラートが死んでしまうから仕方のない事だろう、腕はもう戻つ

てこない。

「…ジエラート、止血はした。立てるか？」

「あ、ああ…」

リゾットの声かけに答えてはいるが、どこか反応は弱々しい。やはり血を失いすぎたのだろう。

だが、止血すればいいってもんじやない。皆知っているつもりで知らない。俺だけが知っている、ボスの異常とも言える用心深さ。それに過去を探ることを最も嫌うのは周知の事実、いつ追つ手が来るか分からぬ！

その事を最も恐れているのは俺だろう、なんせ最悪の未来を、最もあり得る可能性を知っているのだから。

「リゾット、取り敢えず逃げないか？このままじやあ不味いぜ！」

俺の声に反応してイルーゾオが鏡を取り出す、それだけで俺達は何がしたいのか理解できた。確かに『鏡』ならば見つからず、それでいて無敵だ。

「やつてくれ、イルーゾオ」

リゾットのいつもより低い、殺意のこもった声に聞きながら俺達はイルーゾオの世界へと入っていく。おそらく、ここが分岐点だろう。

「仕事をしてやるよ、宣言してやる。報酬は…高いぜ、ボス」

俺の呟きは誰に聞かれる事無く、暗いアジトの闇へと吸われていった。

「それで何があつたんだジエラートッ！てめえらのコンビが怪我を負うなんざあり得ねエだろ!?」

その通り、ソルジエラのスタンドはコンビで組めば無敵に近い。探知系のスタンドや無差別広域攻撃できるスタンドじやないと攻撃をヒットさせる事すら難しいだろう。

だが、現にジエラートは腕をやられソルベは…無事なのかすらわからない。

「お、俺達は見ちまつたのさ…別の組織の野郎がボスの情報を調べてたみたいで…その書類をよオ…」

悔しそうに歯を食い縛りながら涙を流すジエラート、こんなことになろうとはな…最悪の事態を避けようと働いていたのに、結局こうなつてしまつた。『運命』の修正か…『物語』の筋書きか…変えることができないのかと疑いそうになる。だが、少なくともジエラートは生きている、これは原作にはなかつた。俺の働きで原作からは大きく逸脱し始めているはずだ。

「それで…急いでアジトに帰ろうとしたんだよ、見ちまつたからな…たいした情報じや

あなかつたんだけどよ』

「それで？帰つている最中に襲われたのか」

「そうだ、ソルベが時間を稼ぐつて俺を…クソッ！なアリーダー、わかつてるだろ？やらなくちやいけない事をよオ…頼むよ、俺のせいで…嫌なんだ」

リゾットが額に汗を浮かべて聞き返す、そしてそれに対し答えるジエラート、肝心の情報は言わない。俺達の顔は真っ青で怒り顔。そりやそうだ、俺達チーム存続の危機だぜ？情報だつて聞きたいんだ、仲間を傷つけられ、鬱憤も貯まつてゐるんだからな。でもしここでその情報を聞いてしまえば、俺たちまで肅清対象だ、だからジエラートは言わない。しかし、無視して放置するには傷つけられた奴が悪い。

俺達はかつてない選択を迫られている。生きているかわからないソルベや『見て』しまたジエラートを助け、ボスに反旗を翻すか。

それとも、二人を切り捨て俺達の保身を図るか。

前者ならば確実に原作からはストーリーが変わる。ボスの居場所を教えてくれる護衛チームの存在も無く、俺達は自力でボスまでたどり着かなくちやいけない。ハツキリ言つて無謀だ。対策もなく勝てる相手じやあないからな。

だがしかし、後者はもつとダメだ。仲間を見捨てる？そりや仕事を確実に遂行するためならば、俺達は…少なくとも俺は見捨てられても良いと思つてゐる。それくらいの

『覚悟』をもつて行動しているからだ。おそらく、ジエラートが言いたいのも後者だろう。見捨てて生きろと言いたいのだろう。

だが、言つたはずだぜ。俺は一人でも多く生き残らせるとな。

「ジエラート、みなまで言わずともお前の言いたいことは分かる。：ジエラート、恨むのは俺でいい。お前達を守れなかつたのは、リーダーである俺の責任だ」

「…リーダー」

皆の間に不思議な空気が流れる、いつかは別れも来るとは覚悟していたが：皆現実感がないのだろう。俺だつて現実とは思いたくないさ、だが結果はこれだ。

俺が提案した密輸のせいで、ソルベとジエラートが死ぬ。それが重く、俺の両肩にのしかかる。俺の不甲斐なさのせいで…！

「エイブ」

聞きなれた声に思わず振り返る、するとそこには片足と片腕を切断されたソルベがいた。どうにも俺は回りが見えなくなるほど狼狽していたらしい、イルーゾオが鏡の世界にソルベを入れた事も、声をかけられるまでわからなかつた。

「俺達は大丈夫だ、ちとボスの監視下に置かれちまうが：死ぬことはない、と親衛隊の野

郎から言われたぜ」

「そうだ、お前のお陰で俺達チームは金を得た。それで俺達が死ぬことになつたとしても、それはチームのためだ。お前に気に病まれる筋合いはねえよ」

二人の言葉に、俺は言葉を失つてしまつた。俺のせいとばかり思つていたのは、彼らの『覚悟』を汚すこと。そんなことも分からなかつた自分に今度は激しい憤りを感じる。

「だからまあ……」

二人の声が重なる、この二人だからできる自然な芸当を、俺達が再び見れるのはいつの日なんだろうか。これから死ぬかも知れないというのに、笑つていられるのはその『覚悟』故に……。

「任せたぜ」

## 蜂の啓蟄

俺達が反逆を決意してはや2年。ソルベは意識不明の重体、ジエラートも片腕を失つたあの出来事から、気づけばもう2年が過ぎていた。どうでも良いことにはついぞ興味の湧かない俺だが、今回ばかりは色々と調べたりとなにかと入り用なものが多かつた。まず、ソルベとジエラートはあの後親衛隊の奴等に一年ほど監視されていた。俺達もその間は下手な行動は起こせないので機を待つた。どうにももどかしい時間を黙々と過ごして行き、漸く一年が経とうとしていた頃、ソルベとジエラートが俺達の下に戻ってきた。

そこからはもう火の車だつた。今更かき回すのもどうかと思うし、どうでもいいから細かいことは省くが、ソルベとジエラートの二人を匿いながらの極秘調査。無論のこと俺やイルーゾ、ホルマジオ等の潜入しやすいメンバーでの調査になつた。

その間に他のメンバーで匿う場所を探してもらつた。その結果各地のアジトの床下に小さな空間を作り上げ、そこにホルマジオの能力で過ごしてもらう事にした。この作戦は見つかりにくい上に食材の量や使用した水量から人数を割り出されないなど、バレにくさという点ではとてもいい作戦だ。

ただ、ホルマジオが死ねば能力が解除されてしまうため、ホルマジオはボスへの反逆を起こしたときに戦闘への参加は事実上不可能となつてしまつた。ホルマジオの代わりの地区での調査は俺が担当する、これで主人公達と戦う相手…つまり、先鋒の役割は俺になつたわけだ。

そして、そうこうしている間にもう一年が過ぎた。それが今の俺達である。つい先程ボスの手がかりとして、娘の情報が手に入つたのだ。情報分析チームの奴を脅して入手しただけの価値はある情報だった、情報チームの一員を脅したということは組織を裏切つたと同義、これで糞みたいな情報しかなけりや皆喰いちぎつていたところだ。

もつとも、そのチームの奴は今頃全身に毒が回り、生きたまま肉団子にされ死んでいるだろうがな。

「この『ボスの娘』の情報…どう思う？この資料によれば、スタンドまで関係しているらしいが」

メローネが手に持つていた紙の束を机の上に投げ出す、それにともない皆も目を通していくが、正直全部嘘臭い。どうにも騙されている感じが抜けないのだ。

「どうするリーダー？俺達を嵌める罠かも知れねエし、そうじやねーかもしけねエ…アンタが決めてくれ」

「ま、こんな上手い話はねえと思うがな。どー考えたつて罠だぜリゾット、あのボスが『娘』なんてバカみたいにデケエ情報を残すわけがないだろ」

「んな事アドーでもいーんだよ、問題はよオー！ソルベとジエラートの仇を討つためにやどんなことでもなりふり構っちゃ居られねーってことだぜッ!!」

「フム…だが、やはり血縁関係があるからといって『スタンド』も関係している…とは思えないな。スタンドは精神の具現化、血でどーのこーのなるもんじゃあない」

「今更そんな事言つたつてしようがねーだろ。問題は襲撃するタイミングさ、俺達や今から個人で行動するんだろう？そりゃあ俺はソルベとジエラート、リゾットと一緒にだがよオー。襲撃のタイミングつてのは重要だぜ」

「襲撃は近くにいる奴からだろう、情報収集と共にやりやあ一石二鳥だ。俺達のチームに〈仲間がいなけりや何もできません〉なんて事言う奴ア一人もいねえはずだからな」「兄貴…。俺頑張りますぜ！」

皆が皆自分の意見を言つていくなか、俺はこの先を考えていた。俺が戦うとしてどのくらいの傷を受ける？俺が勝てなければ俺達の道は同じになるかも知れない。これは罠か？確かボスの娘にもスタンドはあつたはずだ。そしてなにより…ボスの娘の生まれ故郷に、ボスの正体に迫るなにかがあるはずだ、娘が引っ越したりしていなければ…だが。

「やはりお前達もそう思うか…エイブはどうだ?」

リゾットの漆黒の目が俺を捉える。あの目は俺に問いかけているのだ、『お前は自信があるのか』、『お前は覚悟できたのか』と。

「買だろうとなんだろうと…俺達はただ始末する。それだけだろう?それに…もしスタンド使いじやなくとも、スタンド使いじやないという情報は手に入る。損は無いと思うぜ」

その目に俺はこう返す。『当たり前だ』とな。

からつと晴れた晴天…とは言いがたい天気の中、俺はとある車を追っていた。追つている、というと相手が逃げているように聞こえるかもしれないが、別にそういうわけではない。ただ単に目標がその車に乗っている…というだけの下らない理由だ。

始まりは、ホルマジオが言つた一言。

「ボルポの葬式…1つだけ来ていいないチームがあつたぜ」

俺達は、ボスの娘を匿つてゐるチームを探すため、俺達の情報網を駆使してこのパツシヨーネのチーム全てを洗つていたのだ。情報を探すには、情報チームを襲つたことは

まだバレていなない今しかなかつたのさ…めぼしい収穫はないままだつたがな。

だが、ホルマジオのこの一言で一気に情報が集まつたのだ。来ていなかつたチーム：それは、死んだポルポのお気に入りで新しく幹部に上がつたブチャラティ！ブチャラティチームの奴等だ！

ブチャラティがスタンド使いという情報も手に入つた、それ以外のメンバーはわからなかつたが。

そろそろ仕事に入ろうか。目標は…あの少年、資料で散々読んだ、俺には嫌というほど見覚えがあるその姿…ツ！

オレンジのバンダナのようなもので黒い癖のある黒い髪の毛を纏め、肩出しの服、それから…あれは、スカート？なんと言うのか…まあ、どうでも良いことだろう。

俺はあの少年を知つてゐるぜ…情報通りだ！アイツは…アイツの名は『ナランチャ・ギルガ』！ブチャラティ率いるブチャラティチームの一員だツ!!

「よオー やく見つけたぜ…ナランチャ」

さアーて、仕事の時間だ！

## 蜂使いと送り蜂

さてと、これからあの少年をすこしばかり追跡して『ボスの娘』の正体を明かしていくなければならない訳だが……俺のスタンドは手加減が苦手だ、ホルマジオのように上手い具合に拷問なんぞできやしない。だからこそなんだが。

「隠れて追跡……バレればコイツで始末する」

懐から拳銃を取り出す、装弾数15発の自動拳銃……勿論サップレッサー着き。俺がスタンド使いと戦うときにはいつも持っている必需品だ、今までこいつがなければ死んでいた可能性だつてあつた。

こいつで頭をブチ抜く、そして後はキラービーの強靭な顎で少しずつ肉団子にしてやろう。

そうと決まれば早速動く、今いる場所は街中だ。街中故にこんなビルの屋上で張り込めてているが、もし俺達がボスの娘を護衛するとしたら、こんな街中に拠点を据えるか？

——答えは否。俺なら伏兵の心配なく、なおかつ怪しまれない程度の郊外に拠点を

置くね。ならばアジトの場所は……。

「町の中間地点辺りが、一番のポイントかもな……まあ、見つかるまではわからんがさて、始めようか。俺達の戦いを！」

ナランチャはどうやら買い物に来ていたようだ、女物の品物を買い込んでいた。だが、妙だ。何故アイツが女物を買う？ アイツの趣味か……？ N Oだ。答えは1つかねーよなあ？

「やはりテメエ等が『当たり』だぜ……」

俺はキラー・バレットを展開する、ただし3匹だけだ。あまり多すぎると見つかってしまう、だから俺は1匹だけを奴の車の裏へと潜伏させた。これで俺は感覚で奴の居場所が大体分かるようになつた。その上、残りの2匹を遠くから追尾させる。例えどんなに視力が良かろうと……遠くから1匹ずつバラバラに飛んでくる蜂をスタンダードだと気づくのは不可能だ、もしあづかれても、それはアイツのスタンダードが探知もしくは『見る』という事に特化したスタンダードだと知ることができる。どちらにしろ俺の有利に動いていく。

「送り狼みたいにお前のアジトへ俺を送ってくれよ……ナランチャヤ」

俺の咳きと共に発進するナランチャヤの車、それと同時に俺も車を使つて走りだす。道は違うが、俺のスタンドからの情報が、カーナビの様に親切に道を教えてくれる……迷うことなく、俺達は決戦の舞台へと走り始めた。



ナランチャヤは焦つていた。今までの経験から、『何か』が迫つていることは理解できた。だが、その迫つている『何か』が組織の裏切り者なのか、単なる危険なのか……そこまでは分からぬ。

故に、ナランチャヤは焦つていたのだ。

「クソ……視線みてえなのは感じるがよお、何も居ない……どうなつてんだ」

万が一敵だとすれば、焦つては相手の思うつぼである。そうわかつてはいても、人は簡単には冷静にはなれない。それも、常に殺気のようなものを孕んだ視線がするともなれば無視することも難しい。

だが、ナランチャヤのスタンドならばその根元を探知できる。今までも……ずつとそ

やつて邪魔物や敵を排除してきたのだから、その方法に信を置くのも頷けるものだろ  
う。

急ブレーキを踏み、ゆっくりと車から降りるナランチャ。その目には視線の主へのイ  
ラつきと、それを排除しようという覚悟がチラリと映る。

——チンピラ風情なら、足元撃つてビビらせりやいい。

そんなことを思いながら、ナランチャはレーダーを覗き込み、自身の片割れである『工  
アロスマス』を発現させた……それが敵の狙いであることも知らずに。



「かかった……！」

俺は双眼鏡に映し出されるその光景を、網膜に焼けつけんと眼を凝らす。漸く分かつ  
た、あいつのスタンド！

「小型のラジコン飛行機のような……ありやあ物質型だな。距離も分からんのにスタン  
ドをだすってことは、つまり……」

その行動から導き出される答え、そんなもの決まっている。視線が近いか遠いかは何

となく分かるだろう。それも、スタンド使いのような『感性』が鋭い、というより一部イカれてるような奴等なら……ギヤングならば尚更だ。

にもかかわらず、スタンドを発現した。それは……

「テメエのスタンドが……中距離から遠距離型だつてことだぜ」

これで、恐らくだが相手のレンジが分かつた。得意が分かればやりようは増える。だが、まだ攻撃方法が分からない。戦闘機ということは、あの機体下部についてるアレは機銃か何かなのだろう。つまり撃たれるのは不味い。戦闘になつた際の始末する優先度合いは高めに設定する。

何かを探つている様な仕草をするつてことは……上から探つてているのか？

……後ろから追跡しているせいで、ナランチャの顔が見えない。顔が見えないつてのはめんどくさいな……何を考えているのかが分かりにくい。まあコイツは大分仕草や行動に出るタイプみたいだが……。

何かを諦めたように車に乗り込むナランチャを見て、コイツはバカそうだと確信する俺であつた。俺も急いで車を出す、流石に射程2kmはなかつたようで安心した。

さて、どうやら着いたらしい。俺との距離500m程。南東にあるブドウ畠、出てきたのは情報通りブチャラティチームのメンバーだ。

フフ……居るじゃあないか、情報に入つてなかつた人間が。アイツらが匿まうように立つてはいるが……俺達の追い求めた女がッ！

あのピンクの髪の女は！　事前情報に入つちや居なかつたッ！　金髪のガキもだ！　コイツらが怪しい……だが、どう考えても金髪のガキはボスと関係はなさそうだ。もし、もしもだ。アレが護衛対象なら……あんな目立つよう配置はしないだろう。ボスに居るのは娘ッ！　つまりはあのピンクが目標だ！

「キラーバレット……奴等に適当に襲いかかれ！」

俺の声に合わせて発現するキラーバレット。キラービー200匹、バレットビー100匹、総勢300匹の死の軍隊。

それを100ずつに分け、三方から襲撃させる。そのうちに……あの娘を奪取する、もしくは肉片を切り取り持ち帰る。それだけで俺の勝ちだ。俺の位置は把握されちゃいない。近くの建物……こりや資材置き場か？　そんなところに隠れた俺を、発見する

ことは不可能だ。

「つまり……どう転ぼうが俺の有利だつてことさ」

俺はゆっくりと双眼鏡を覗き、口元に笑みを浮かべる。待ちに待つた時が来た……」  
これからが俺の勝負だぜ。

「ショータイムだ……精々いい声で鳴きやがれ」

## 先鋒、対峙

今回の任務では、仲間からの支援は當てに出来ない。仲間達……暗殺チームの面々は皆、一人一人が個別で情報を収集し、それをリーダーの元に送るという方法をとつている。無論、俺もだ。

この作戦の利点は二つある。一つは手分けして探すので情報が見つかりやすい、一ヶ所に人を集めれば精度は上がるが数は探し難いからだ。二つ目は単純にバラけていた方がボスや組織の監視の目を掻い潜りやすいということ。

俺達は皆、ライバルであり仲間である。各々が各々を信用しているからこそ、一人一人別行動という一見危険な行動に出られたのだ。

だが、良いことばかりではない。現状の俺のように、コイツら護衛チームと当たるものも当然一人となるわけだ。厳しい戦いになることは皆予想しているし、恐らくだが万が一俺が奴等に敗北したときの事もアイツらは考えているのだろう。

「だからこそ、アイツらに負担を強いない為にも……ここで俺が片をつける！」  
キラー・バレットが足下や頭上から一斉に飛びかかる。俺のスタンダードを初めて見た者は、大抵生理的嫌悪感から足がすくんだりするもんさ。

「ツ?! スティックキー・ファインガーズ!」

だが、予想に反して奴等の行動は早かつた。果敢に襲いかかるキラー・バレットだが、いち早く気付き、動いたリーダーであるブチャラティに叩き落とされる。アバッキオ以外の各々もスタンドを発現させ、襲いかかるキラービーをスタンドで落としていく。だが、その行動が既に俺の作戦の内だということは……気づいてんのかア?

「ブチャラティ! トリッシュはどうしますか!?」

「ミスターとアバッキオ、フーゴはアジトの中へ! 後は俺と共に、このスタンドの主を倒すぞ!」

穴だらけのスーツの男……パンナコッタ・フーゴが慌てたように叫んだ、どうやらボスの娘の名はトリッシュと言うらしい。あの男はスタンドを出している割に、なかなか攻撃しようとしないな……攻撃系の能力じやあないのか? ……いや、攻撃系の能力じやあないならば、咄嗟にスタンドを発現させるような癖はつかないはずだ。現に、あの頭に卵の殻をのせたようなアバッキオはスタンドを出していない。つまりアバッキオのスタンドは攻撃タイプではないということだ、攻撃できるスタンド持ちでなおかつギヤングみたいな危ない仕事をしていれば、緊急時に即座にスタンドを出すなんて呼吸と同じようなもんだからなあ……。

まあ、今は先にトリッシュの血液や肉片の採取が先だな。それさえあれば基本は問題

なく、メローネのベイビイ・フェイスで追跡が可能になるだろう。流石にすぐには無理だろうが、奴なら必ず解析してくれるはずだ。

ならば俺は俺にできることをしよう。俺の能力がボスの居場所を突き止めるのに役に立つか？

答えは否、俺の蜂は殺し以外は難しい。だが、殺しに関しては……誰にも負けない自信があるツ！

「お前らが殴り飛ばしたキラービーにも……毒液は含まれている。そして、蜂の毒の中には仲間を呼ぶフェロモンが含まれているんだぜ」

今まででは！ 目視でしか確認できなかつた居場所がよオー！ 今なら寝ても分かつてしまふなアツ!! お前らの拳からふんふんと匂いがするんだよ、匂いがしない人間はアバツキオ、トリツシユ、ミスターの三人だけ！ フーゴもナランチャも拳で攻撃はしちゃあいないが……撃ち落してくれたおかげでそこに蜂の死骸が落ちている！

それを踏んでしまえば、例え直接攻撃しないナランチャのスタンドでも本人には毒が付く！ 踏んでいないのはアジトにこもつたアイツらだけだ！

「出番だぜバレットビー！ 毒の匂い目掛けて突っ込めツ！」

俺の合図を待つていたバレットビーが、一斉にターゲットへと勇み行く。反応できたのは新入りとブチヤラティのみ、後の奴等は反応が遅れる。

「うおおおお！ なんなんだよコイツらッ!!」

「くッ!! つ泣き言は後です！ スタンドの本体を……本体を探さなくては！」  
 「ナランチヤ、レーダーの感知範囲を最大まで引き上げろッ!! 敵の居場所を発見する  
 んだ！」

「おいおい弾丸だとオ？ 僕に対してそりや悪手だぜ襲撃野郎ッ!!」

最初に攻撃されたのはナランチヤだ、服装が黒いぶん狙われやすいのかも知れない。  
 当たつたのは足、これで行動範囲とれる行動はかなり狭まつたはずだ。続いて新入り、  
 被弾は肩と拳だ。あの傷では攻撃は愚かモノを掴む事すらできまい。ブチャラティ  
 は脇腹、一番の重傷だろうよ。

だが……問題はミスターだ。アイツのスタンドが何かをした瞬間、僕の方向へバレット  
 ビーが弾き返された。一瞬位置がバレたのかと焦つたが、どうやら違うらしい。

ヤツのスタンド能力は反射なのか？ ミスターは要警戒だな……といつても、仕事は、  
 もうとつくに終わっているんだがね。

悲鳴が響き、聞こえてくる発砲音。蜂は小さい、それこそ生物を探知するような能力  
 じゃあなけりや、隠れた俺のスタンドを見つけるのは難しい。

その上、下水道からアジトに上がつてくるだなんて……普通は考えつかんだろうぜ。  
 もつとも、それが俺の能力が強い由縁なんだがな。

！」

「ミスター！ ナランチャ！ 僕とジョルノは中を見てくる、お前達は周囲を警戒しろッ  
れてる！ まともに戦えねえよー！」

「だが室内の戦闘は、俺たちの方が向いているツ!!」

警戒しながら、かつ急いで中に入つて行くブチャラティと新入りの二人。納得できな  
さそうに見送つたのはミスターとナランチャか……反射スタンドと中距離スタンド……  
不味いな、相性が悪い。

もつとも、既に『肉片』とそれに付着した『血液』はたつぶりと頂いた。全員に毒を  
注入しているから喋ることすら困難だろう。

ああ、今回も完璧な仕事だつた……ツ!!!!

ンー、やはり完璧な仕事の後は気持ちがハレバレとして清清しい。やはり暗殺者たる  
ものこうでなくては、バレず、悟られず、任務をこなす。それが真の暗殺者だろう！  
「……そんなことはどうでもいいな」

そう呟いて自分を戒める。そして軽やかな足取りで隠れていたその場を離れた。勿

論、周囲の警戒と奴等の視界を頭に入れて、なおかつその視線に入らないように、だ。

にもかかわらず。

バタバタと何か音が聞こえてきたのだ。頭上から、まるでヘリのローター音のような  
……ツ!?

それは一瞬だった、振り返ると同時に太陽の光が目を刺す。闇に生きる俺を刺し殺さ  
んと振りかかる光を背に、そいつは居た。

橙色のボディを鈍く光らせ、機銃だと推察した例のあれを俺へと一心に向けている。  
本能的に不味いと分かった。

「キラー・バレット!俺の背中を咥え一面に展開しろオツ!!!!」

俺が吠え、キラー・バレットが背中に現れると同時に、背中に数多の弾丸が撃ち込まれていた。